

ふるさと浪江町を考える懇談会議事概要

1. 日 時 平成25年8月4日（日） 11:00～13:10

2. 場 所 芝浦工業大学豊洲キャンパス 交流館3F カフェテリア

3. 出席者

町民等	83名
コーディネーター	1名
話し合い支援	22名（高崎経済大学学生）
有識者・オブザーバー	3名
事務局	22名（復興推進課：7名 生活支援課：6名 浪江町復興支援員：9人）

4. 議 事

- (1) 開会
- (2) 課長あいさつ
- (3) コーディネーター紹介
- (4) 事務局説明 『まちづくりに関する現状説明』
- (5) グループ討議 テーマ：ふるさと浪江町を考えるワークショップ
- (6) 交流会
- (7) 閉会

5. 議事概要

○課長あいさつ

復興推進課 宮口課長

- ・震災から数えて二代目の課長になるが、震災以降は議会事務局に在籍しており、その時はまちづくりがどうしても進まないのかと思っていたが、自分が担当となると時間が経過するのが早く、まちづくりの成果がなかなか現れてこないというもどかしさ、ジレンマの中で仕事をしている。
- ・皆様においても、震災から2年5ヶ月が経ち、慣れない場所で大変なご苦勞をしながら過ごされていることにお察しする。
- ・復興まちづくりに関しては、役場職員だけでは解決出来ない多くの課題がある中、仕事を進めている状況である。
- ・今年の7月から、昨年度に策定した復興まちづくり計画に基づき、復興計画の柱のひとつであるふるさと浪江の再生に向けた取組みとして、まちづくり計画検討部会を立上げ、部会を2回開催し、その中で議論を進めている。
- ・部会の委員の方々には、福島県内外から集まって頂き、まちづくり計画について議論して頂いているが、福島県外に避難されている方々の声をまちづくり計画検討部会に反映させて行きたいと考えている。
- ・よって、今日は、皆様のそれぞれの思い、浪江町に帰れる、帰れないという思いも含め、忌

憚らない議論をして頂きたいと考えている。

○コーディネーター紹介・事務局説明

復興推進課 金山係長

- ・本日は、高崎経済大学地域経済学部櫻井常矢先生に会の進行役をお願いしている。
- ・櫻井先生は浪江町の復興ビジョン、復興計画の策定に有識者として関わって頂いた他、皆さんのお手元に届いている広報誌の浪江の復興の取組みについて、中心的に関わって頂いている先生である。

高崎経済大学 櫻井常矢コーディネーター

- ・今日は、各テーブルに高崎経済大学の学生が2～3名座っており、総勢40名を超えるスタッフで今日の懇談会を支えていきたいと思っている。
- ・今日のまちづくり懇談会については、一昨年1月に東京国際フォーラムにおいて、第一回目の「しゃべり場」を開催しており、その流れを受け、再度東京での開催となった。
- ・今日は東京在住の方だけではなく、埼玉、神奈川など遠方の方も参加されており、この時間を大切にしていきたいと思う。
- ・現在、浪江町役場において、有識者の先生方や委員の方々等で構成されるまちづくり検討部会を開催し、平成29年3月に帰還開始が予定されている低線量地域を含め、どのようなまちづくりをしていくのか議論を行っている。
- ・帰還に係ること、それ以外の現在の生活に係ること等、色々な意見があると思うが、今日は浪江町が「今後どのように整備されていくべきか」、「私たちが帰還するまでにどのような町であってほしいか」について意見交換をして頂きたい。
- ・最初に役場から、現在の町の状況を含め、部会での検討状況や今日話し合う内容について説明をお願いしたい。

復興推進課 近野副主査

- ・①ふるさと浪江の復興のあり方について、今まで策定された復興ビジョン、復興計画の中でどんなことが決められたのか、②7月からスタートしたまちづくり部会の検討状況、③今日皆様方に話しあって頂きたい内容、④今日の議論して頂くふるさと再生に係る情報について、この4点について説明させて頂く。

〈事務局説明〉

○グループ討議・グループ発表

高崎経済大学 櫻井常矢コーディネーター

- ・しゃべり場ということなので、1時間程度であるが、いつものようにいろいろとお話を頂きたい。
- ・ここからの進行は学生にお願いする。

〈グループ討議〉

高崎経済大学 櫻井常矢コーディネーター

- ・それぞれのグループでどんな話し合いがあったか、皆さんに聞いて頂きたいので、地区別に

1 グループずつ発表をお願いしたい。

津島・大堀地区②グループ

- ・気になっていることとしては、除染の問題や帰還後高齢者だけで住めるのか、若者の問題、子供は住めるのか。その他、町外コミュニティについて意見が出た。
- ・今後どのような町であってほしいかということについては、原発事故を福島から情報発信するような施設を観光施設とする。交流の場が必要であり、祭りの開催や伝統芸能の継承等、施設だけでなく人が集まる催しが必要。一番の本音は、原発事故前の浪江町に戻りたい。
- ・平成 29 年 3 月に向けてということでは、帰還後にスーパーなどの生活基盤が必要。宅配サービスなどあればいい。
- ・医療機関が必要であり、また、医療機関までの専用の交通機関が必要ではないか。
- ・現在、仮設住宅から医療施設までの交通機関で苦勞しており、福祉車両の導入が必要である。
- ・農家には農地が必要であるが、除染の問題もあるので野菜工場等の導入を検討してほしい。
- ・水辺と緑のある環境が必要である。
- ・補償に頼るのではなく、自分自身で働くこと、自立ができるような雇用の場が必要である。住居だけあっても駄目である。

荻野地区②グループ

- ・気になっていることとして、本当に平成 29 年 3 月に帰還できるのか。また、帰還後、生活はできるのか。問題はないのか。
- ・帰還できる、帰還できない判断をはっきり国で決めてほしい。今後の生活にも影響する。
- ・一番大事な話として、コミュニティのあり方については個人の自由なので、浪江町民を一つ場所に集約しないしてほしい。個人の事情を尊重してほしい。
- ・若い人達、子供達は浪江町に本当に帰還するのか。

請戸地区②グループ

- ・平成 29 年の帰還を見据えてということで、いろいろな意見が出たが、平成 23 年の原発事故前の状態、子供達が戻って来ることのできる浪江町にしたい。
- ・今後どのように発展していけば良いかということについては、国の指導により、港に新しい産業が発展すれば、請戸地区は変わり、請戸地区のイメージも変わると思う。ただ、デメリットとして、環境が変わってしまうのではという意見も出た。
- ・請戸地区では再建を考えていない、家は建てないという意見が多くなっているが、お墓の移転先が必要であるという意見はあった。
- ・文化財、祭りなど伝統は継承して残したい。
- ・相馬焼きを残してほしい。
- ・移転等により密集した生活環境になり、コミュニティ問題が心配である。

浪江地区④グループ

- ・本当に浪江町に帰れるのか、帰れるとしても本当に帰る人がいるのかという意見が多く出た。
- ・もし、帰れるのであれば、帰還希望が多い高齢者中心の住みやすいまちづくりが重要ではないか。

- ・高齢者だけでは問題も多く出てきてしまうので、若い人達が帰還したくなるまちづくりが必要ではないか。
- ・交通、病院、スーパーなどの生活基盤の整備が必要ではないか。
- ・すべてにおいて放射能の問題が大きいため、除染作業に力を入れて進めてほしい。

高崎経済大学 櫻井常矢コーディネーター

- ・その他、発表していないグループにおいても、是非皆に聞いてほしい、言っておきたいということがあれば、ご意見をお願いしたい。

荻野地区②グループ

- ・放射線に関する専門的な研究機関を誘致したい。

高崎経済大学 櫻井常矢コーディネーター

- ・今日、皆さんから出されたご意見は記録として残し、またまちづくり計画検討部会にも出されることとなります。そして、今回参加できなかった町民の皆さんにお知らせすることも含め、今日議論した内容を今後のまちづくりの検討に反映していくことになっています。
- ・全体の議論をまとめるというのはなかなか難しいが、今日の意見を聞いていて感じたことがいくつかありました。3点にまとめてお伝えしたい。
- ・まず1点目として、皆さんが共通して大きな矛盾や葛藤を抱えながらこの議論をされていたということです。
- ・この「しゃべり場」を2年間続けてきている中で、2年前とは皆さんの議論が変わってきているとお互い感じているところがあると思います。具体的には、数か月前の「浪江のこころ通信」の記事の中に「震災から2年が経ってこれからが本番」、「これからが浪江町にとっての本番、被災者にとって苦しい時期が来る」という県外避難者である女性の方の言葉を掲載しているのでぜひ読んで頂きたい。
- ・先ほどの発表を聞いていても、誰もが浪江町の復興を考えており、震災前の浪江町に戻してほしいという意見、皆さんの共通の思いだと思います。
- ・一方で除染をしないと復興の議論等できないとの意見、高齢者世代の帰還希望が多いが子供達の帰還がなければまちの存続は難しいとの意見、自分は当面は帰還できないと考えているが、浪江町がどういう町になっていくのか議論には是非参加したいとの意見などがあつた。
- ・今日、皆さんは、このように矛盾や葛藤を抱えながらまちづくりについて議論して頂いたと改めて感じており、まちづくり検討部会の委員の方々においても、同じような矛盾、葛藤を抱えながら議論されている。苦しい議論をしていることが皆さんの言葉からも見えてきた。
- ・2点目として、これまでの復興に関する議論が、成果としてどのように現れているのか、浪江町の復興がどこまで進んでいるのかが実感として感られないということ。また、この先来年、再来年とどうなるのかが見えない中で、どのような意見を発言したらよいかわからないという意見があつたことである。
- ・町の情報は広報誌やホームページを通じて発信はされているが、お互いの思いを言葉で出し合い、理解するという状況までには至っていない状況にある。町役場にもお願いしたいことであるが、町民同士がお互い言葉を交わすことで見えてくるものもあり、これから進んでいく復興の道程や今日までどの程度復興が進んできたか等、町民の皆さんとの情報共有をもつ

と丁寧に、今まで以上にやっていかなければならないと感じました。

- 今日議論した内容についても、町民の皆さんにどのように伝えていくのか、会場の皆さんと有識者の方々も含め、大事にしていけないといけない。また、皆さんの意見がどのようにまちづくりに活かされていくのか確認が必要だと思います。
- 3点目として、今日発表された意見の中で、町民が集える場がほしい、町には戻らないがお墓は浪江町にあってほしいという意見が多くみられたことです。
- 一時的にも帰れる場所であってほしい、伝統、お祭り、文化の継承等を通じて町民が交流できる浪江町であってほしい、お墓参りは浪江町へ帰りたいなど、浪江町と行き来することで、町とのつながりを絶やしたくないという意見があった。
- 町民の皆さんが町に帰る、帰らないに係らず、これからも浪江町とつながってほしいという意見は、県外へ長く避難されている皆さんだからこそ、東京会場に集まった町民の皆さんこそその言葉であると感じました。今後進むまちづくり計画においても、町とのつながりや町民同士のつながりを持てる拠点としての姿、そうした復興拠点としてのまちのあり方を考えていきたいという皆さんの思いが随所に見られたのではないかと思います。
- 今日の意見は記録としてしっかり残していく。
- 今日は、まちづくりの計画が具体化していない中意見を頂いたが、今後、もう少し具体化した段階でこのような場を設け、皆さんの意見を聞きたい。

以 上